

## 短 報

## キツネアザミの白花品 (浅井康宏)

Yasuhiro ASAI: A White-Flowered Form of *Hemistepta lyrata* Bunge

我が国へは古い渡来品とされているキツネアザミは、東亜各地の主に人里附近の向陽の低湿地に広く生育する雑草である。

ところで最近、齋藤吉永氏によって本種の白花品が見出された。生育地は埼玉県熊谷市池上の水田地帯の田畔で、通常の桃紫色花をつけるキツネアザミの群落中に点在していたとのことである。

今回の採品は頭花が全く桃紫色を帯びず純白で、すこぶる清楚な感じを与えるが、その他は常品と異ならない。なお本種の白花品についての記録としては、飯沼慾齋：草木図説前篇（草部）巻十五および大正6（1917）年発刊の坂庭清一郎・萱場

柔寿郎：新編植物図説中に、「一種白花のものあり」と簡単に触れているのが見られるにすぎない。これにシロバナキツネアザミ（齋藤）の和名を与え、記載しておくこととしたい。

*Hemistepta lyrata* Bunge form. *nivea* Asai, f. nov.

Flores albi, cetera ut in typo.

Hab. Japan, Honshu: On sunny wet site of Ikegami, Kumagaya-shi, Saitama Prefecture (Y. Saito, May 7, 1992—Type in TI).

(東京歯科大学)

幻の植物マルバクサイチゴを北陸で発見 (若杉孝生<sup>a</sup>, 鳴橋直弘<sup>b</sup>)Takao WAKASUGI and Naohiro NARUHASHI: *Rubus hirsutus* Thunb. f. *simplicifolius* (Makino) Ohwi found in Hokuriku District

マルバクサイチゴは、飯沼慾齋の草木図説5巻98図（北村1977）にマルハイチゴとして出ているもので、1902年牧野富太郎によってクサイチゴの変種として記載発表された（Makino 1902）。和名のマルバクサイチゴは、その後小泉源一（1913）がつけたもので、この名の方が適切なので、後の人はこの和名を使用している。大井次三郎（1953）はこの植物をクサイチゴの品種とした。

この植物の標本を、京都大学理学部植物学教室標本庫、国立科学博物館、東京大学総合研究資料館、および、都立大学牧野標本館で調べたところ、牧野標本館のみに数点所蔵されていた。

牧野の発表時の引用標本は、G. Naguraの三河Kaifukuと牧野の東京での栽培植物である。牧野標本館所蔵のこのNaguraの1895年5月20日採集の栽培植物の標本には、古いラベルが添付しており、それに「富士山産と聞けり」と書かれてい

る。その後、梅村甚太郎著 富士山植物誌（1923）、植松春雄著 山梨の植物誌（1981）、静岡県生物研究会編 静岡県植物誌（1967）、および杉本順一著 静岡県植物誌（1984）を見ても見当たらず、富士山に存在するかどうかは不明である。牧野富太郎の東京での栽培品からの標本を除けば、牧野標本館には、唯一牧野が1913年に豊後で採集した標本がある。しかし、これの詳しい産地は不明であるし、最近出版された新版大分県植物誌（1989）には、マルバクサイチゴは出ていない。また、手元にある幾つかの地方植物誌（引用文献では割愛）を調べても、この植物は載っていない。上記のように、マルバクサイチゴは江戸時代より知られていたにもかかわらず、幻の植物として今日にいたっていた。

著者らは、1992年このマルバクサイチゴを福井県丹生郡朝日町の山林で、花期と果実期の2度

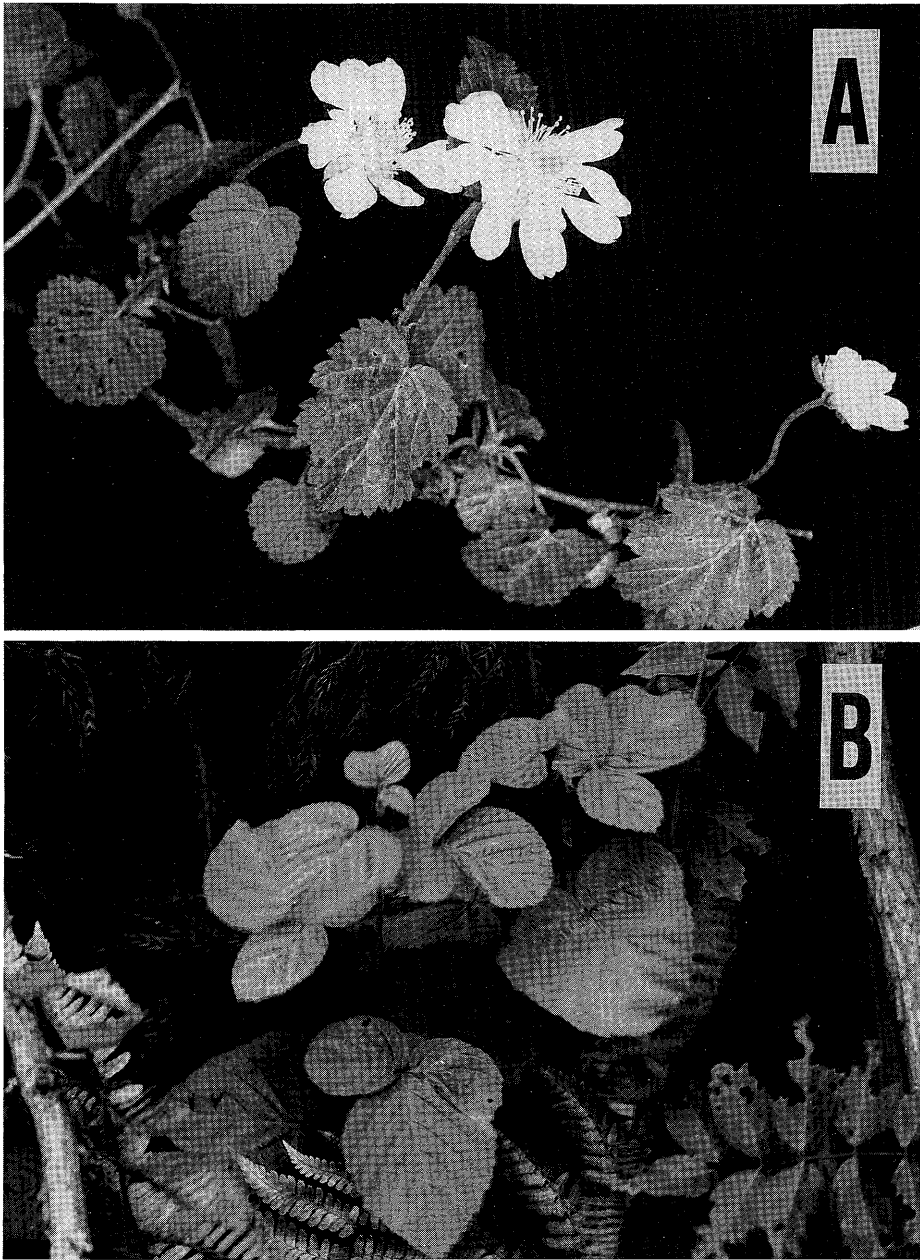


Fig. 1. *Rubus hirsutus* f. *simplicifolius*, A: Florican; B: Primocane. マルバクサイチゴの花茎 (A) と初年茎 (B).

にわたり確認した。植物はまさに牧野の記載通りであった。Fig. 1は開花中の花茎 (A) と初年茎 (B) を示す。花茎の葉はすべて単葉であるが、初年茎の葉は単葉と3出葉、および、その間のいろいろな形の葉をもつ。富山大学のグリーンハウスでの栽培では、初年茎の単葉は卵形で、最大の

ものは長さ 10.4cm, 幅 9.3cm であった。花弁は多弁 (6~10枚) で5枚のものは見当たらなかった。花期に現地の花の花粉粒 2051粒を調べたところ、花粉の正常と判断されるものは 72.5% であった。しかし、果実期での結果率は通常のクサイチゴのように結実していた。

現在のところ、この福井県丹生郡朝日町のものが、この植物の唯一の自生地と考えられる。

標本の閲覧の便を与えられた京都大学植物学教室、国立科学博物館、東京大学総合研究資料館、および、東京都立大学牧野標本館の各関係の方々にお礼申しあげます。

#### 引用文献

- 北村二郎編註 1977. 飯沼慾齋原著 草木図説 木部 (上), p. 203, 図 45. 保育社, 大阪.
- Koidzumi G. 1913. Conspectus Rosacearum Japonicarum. J. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo 34 : 131.
- Makino T. 1902. Observations on the Flora of Japan. Bot. Mag. Tokyo 16 : 87-88.
- Ohwi J. 1953. New names and new combinations adopted in my "Flora of Japan". Bull. Nat. Sci. Mus. No. 33 : 75.
- 大分県植物誌刊行会 1989. 新版大分県植物誌, pp. 806. 大分県植物誌刊行会, 別府.
- 静岡県生物研究会 1967. 静岡県植物誌, pp. 585. 静岡大学教育学部 遠藤庄三, 静岡.
- 杉本順一 1984. 静岡県植物誌, pp. 812. 第一法規, 東京.
- 植松春雄 1981. 山梨の植物誌, pp. 595. 井上書店, 東京.
- 植村甚太郎 1923. 富士山植物誌, pp. 416. 任他樓, 名古屋.
- (<sup>a</sup>福井県立博物館, <sup>b</sup>富山大学理学部生物学教室)

### 四国のサクラガンピ (山中二男)

Tsugiwo YAMANAKA : *Wikstroemia pauciflora* in Shikoku

四国のガンピ属の植物には、ガンピ、コガンピ (イヌガンピ)、キガンピ (トサガンピ)、ミヤマガンピの4種が以前から知られていた。その後、サクラガンピの類があることがわかり、赤澤時之はヤマサクラガンピとよび、*Diplomorpha sikokumontana* Akasawa in Bull. Kochi Wom. Univ. Nat. Sci. 25 : 4 (1977) を学名とした。しかし山中はほかの人の意見もきき、高知県の植生と植物相 317 (1978) では、これをシマサクラガンピとして記録した。ただ、この取り扱いには気がかりな点もあったので、あらためて多くの個体をくわしくしらべてみた。

赤澤はサクラガンピやシマサクラガンピとの異同にはまったくふれていないが、四国のものには、両者の形質が見られることがわかった。

葉、花序、若い枝などの毛は、九州本土や屋久島のシマサクラガンピにも多少があるが、傾向として四国では多く、むしろサクラガンピに似る。萼筒は5~6mmで、両方との違いはほとんど無い。

Hamaya (1955a, b, 1959) が区別点として重視した葉と花序には、四国では変異がめだつ。葉の

多くは楕円形から卵形、基部はくさび形から円形、先は鋭頭または鈍頭でしばしば凸端になるが、鋭先頭または尾状に伸びることはなく、これもサクラガンピに近い。大きさは場所や株により多少異なるが、大きな葉で、長さ45~85mm、幅25~35mmである。シマサクラガンピは屋久島ではごく少数しかしらべなかったが、長さ65~75mm、幅30~40mm、大分県の尺間山ではそれぞれ40~65mmと20~35mmで、四国のものをこれで区別することはできない。伊豆半島のサクラガンピは、長さ30~45 (~55) mm、幅20~30mmで、やや小さいようでもはっきりした相違があるとはいえない。シマサクラガンピは、屋久島では葉が接してつき、葉縁の前後が重なるものが見られるが (Fig. 1-D)、尺間山では離れるものから多少重なるものまで、かなりの変化がある。四国ではそれがさらにいちじるしく、サクラガンピのようにまったく離れることが多く、やや接するものはその3分の1程度、重なる例も少しある (Fig. 1-B, C)。

花序では、葉がサクラガンピは徐々に小さくなるが、シマサクラガンピは急に小さく苞状にかわ